
助っ人？

蒼聖石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

助っ人？

【コード】

N0935W

【作者名】

蒼聖石

【あらすじ】

夏休みに入って会えなくなった寂しさから…

(前書き)

「友人」のシリーズ、3作目です。
若干の性描写がありますので、苦手な人は引き返してください。

「暇だ……………」

夏休み。本来ならあいつと恋人らしくで、デートとかをするべきなのだろうが、休みに入ってすぐ柔道部は1週間の合宿に行ってしまった。

出不精な俺だからずっと家に引きこもって、漫画読んで、ゲームやって、テレビ見て、パソコンいじって、時々宿題をやって。

でもなにか物足りない。物足りない理由はわかってる。あいつがないから。

なんとなくあいつの顔を思い浮かべて、恥ずかしくなってしまう。それを繰り返してもう6日。いい加減飽きてきた。

「姉貴の同人誌でも読むか」

バイトで貯めた金をあの夏の戦場で失ってくるうちの姉貴。画集ばかりで見える気は今までなかったけど、そんなこともどうでもいいくらいに暇だった。

勝手に入っていいよ。と言われてはいるけど一応ノックする。返事はない。

部屋に入ると本や漫画はきっちり和本棚に並んでいるのに、脱ぎ捨てられた下着やらは散乱している。

「相変わらず汚ねえな」

後で洗濯してやらないと。とりあえずこの後の予定を決めた俺は本棚を眺める。

ふと床を見ると、同人誌が一冊放置されてる。珍しいな。と手に取ると、これまた珍しく漫画だった。

「あのゲームのやつか。ふうん、順当なカップリングだな。Bしただけだ」

薄いから大した時間は潰せないだろうけどないよりマシだ。部屋に持ち帰ってベッドに横なって広げた。

「うわ！？な、これ！……成人向けかよ」

今までも色々読んできたけどここまで直接的な表現はしてなかったぞ……

うわ……こんなこと、するんだ……わかってたけど……見ると恥ずかしいな……

「う……。こんな読んだら……しかたないよな……」

ティッシュを枕の横まで近づけてズボンを少しずつらして熱を持ち始めた部分に手を触れる。生理現象とはいえ恥ずかしいな……

「ふ……うん。……はあ」

最初は同人誌を見ながらだったのに、今は目を閉じてあいつの顔が浮かんでる。

弄る手も両手になってる。すごく恥ずかしいのに気持ちよくて止まらない……

「ん……！んん……！」

思わずあいつの名前を口に出したその時
ばあん！と

もう少しというところでけたたましい音でドアが開け放たれる。
そこにはにんまりといやらしい笑みを浮かべ、カメラを持って仁王
立ちしている姉貴の姿。

「引っかかったわね！しっかりと撮ったわよ！可愛い弟のちゅ」
「死ね！クソ姉貴！」

近くにあつたティッシュ箱を顔面に投げつける。時計じゃなかった
だけマシだろ！
とりあえずズボンをはきなおして、鼻を押さえてうずくまる変態姉
に近寄る。

くそ……気持ち悪いし途中だから変な感じだ……
しかもあんな簡単な罠に引っかかった自分が不甲斐無い……

「どついつ了見だ」

「まあまあ。良い情報を持つてるのよ」

「ああ？」

この変態、意味のわからないことでシラを切るうつつなのか。

「あなたの愛し人、今日帰ってくるってよ。怪我したんだって」
「はあ！？なんであいつの連絡先をお前が知ってたんだよ！……じゃ
なくて！」

「だってえ、あの時の見てたもん。あのあま〜いキ・ス」

恥ずかしさで一気に顔に血が上ってくる。

もう駄目だ。殺すしかない。

ベッドに戻って時計を手取る。

「ああ！待った待った！ごめん！ホントごめん！消すから！ね？だからそれはやめて！」

「……………連絡先は？」

「あの子が帰るときに外で捕まえて聞いたのよ」

「あいつは気軽に教えない。何をダシにした？」

あいつの携帯の番号・アドレスは必要最低限な奴にしか教えないし、入ってない。

そんなやつがこんな変態に教えるはずがない。例え俺の姉でもだ。

「ええと……………色々」

「死んでしまえ」

「ヒド！実の姉にそんなこと言うなんて！いいじゃん！寝顔写真の1枚や2枚！」

「死ね！いつの間に撮りやがった変態！」

なんでこんな奴が俺の姉なんだ……………

ん？あいつが帰ってくる？そっか……………

え……………怪我！？

「怪我つて！？え、なんで！」

「そろそろ駅に着くつてよ。迎えに行く？」

「当たり前だろ！」

「じゃあさ、あの子喜ばせてみない？」

「ん？」

数十分して駅前。姉によればそろそろ着くらしい。

いやそんなことはどうでもいい。よくないけどいい。

問題は……

「何だよこの格好は!?!」

「可愛いわよ」

髪を後ろに纏められ、いつもは隠れてる顔にはしっかりとメイクをされた。

そして上はキャミソール、下はしっかりと脱毛処理をされた上で膝上のスカート……

「何でこんな……!」

「静かにしないと、男ってバレちゃうわよ。いいのかな」

「~~~~~!」

「それに着たのは自分じゃん。興味あったの?」

「ねえよ。でも……あいつが喜ぶなら」

そう。あいつが喜ぶなら女装だつてしてやるさ。

見たらなんて言うかな。驚くかな。

すごい楽しみだ。思わず微笑がこぼれる。

「くぅ〜!可愛い!撫で撫でしてあげる!」

「やめる!」

「あ。着いたみたいね」

駅のホームに電車が入ってくる。

なんだかドキドキしてきた……。怪我、大丈夫かな。

改札にゾロゾロと学校指定のジャージを着た集団が現れる。

そこにあいつを見つけて俺は思わず駆け出した。

「大丈夫!怪我したって聞いて……」

「え…？あ、その…」

言葉を返してくれないから顔を見上げるときよとんとした顔で俺を見てる。

もしかして俺に気づいてない？

周りの部員達は、「いつの間にこんな可愛い彼女作ったんだよ」とか「さすがだな」とか冷やかしてる。

「やあ！」

「あ、あなたは。え、じゃあ」

姉貴が声をかけた事であいつはどうやら気づいたようだ。気づかれたとわかるとなんか恥ずかしくなってきた…

「怪我したのは俺じゃない。先生だ。安心しろ」

「そうなんだ……。良かった…」

「よく似合ってる」

「……ありがとう」

喜んでくれた……。嬉しい…！

このままならどんだけ良かったことか。

姉貴がとんでもない提案をしてきた。

「どっ？これからうちに来る？」

そういつてあいつの耳に顔を近づけて俺とあいつだけに聞こえるように言った。

「この子、さっきまであなたの名前呼んで慰めてたのよ」

俺の顔が一気に熱くなる。

一方あいつは口端を上げて笑い、答えた。

「じゃあ、是非」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0935w/>

助っ人？

2011年10月9日10時38分発行